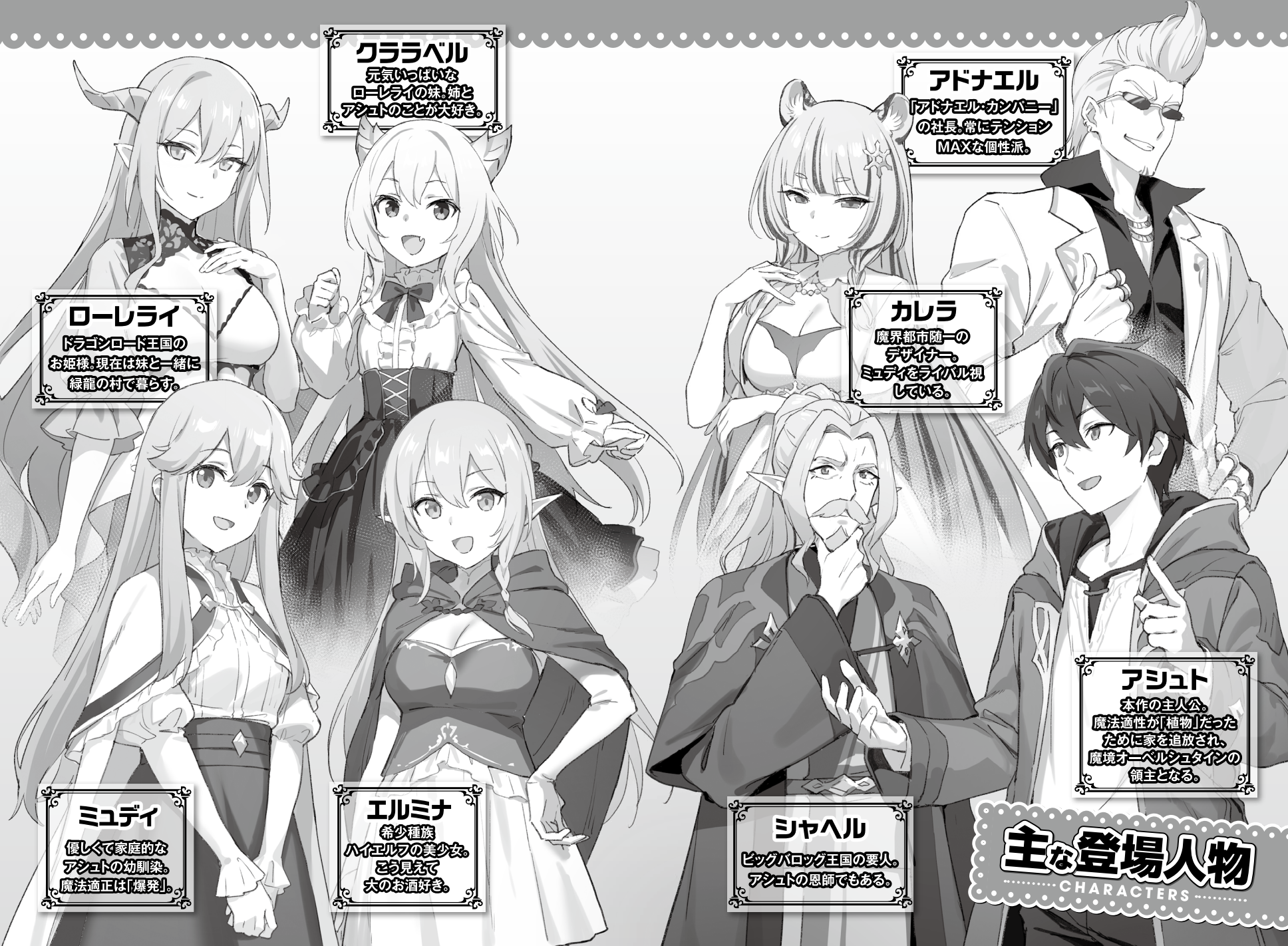
大自然の魔法師アシュト、廃れた領地でスローライフ 11

さとう
SATOU

Illustration
Yoshimo


主な登場人物
CHARACTERS
ローレライ
ドラゴンロード王国のお姫様。現在は妹と一緒に緑龍の村で暮らす。
クララベル
元気いっぱいなローレライの妹。姉とアシュトのことが大好き。
アドナエル
「アドナエル・カンパニー」の社長。常にテンションMAXな個性派。
カレラ
魔界都市随一のデザイナー。ミュディをライバル視している。
アシュト
本作の主人公。魔法適性が「植物」だったために家を追放され、魔境オーベルシュタインの領主となる。
ミュディ
優しくて家庭的なアシュトの幼馴染。魔法適正は「爆発」。
エルミナ
希少種族ハイエルフの美少女。こう見えて大のお酒好き。
シャヘル
ビッグバロッグ王国の要人。アシュトの恩師でもある。

第一章　揃った素材

俺の名はアシュト。広大なオーベルシュタイン領にある『緑龍の村』で村長をやっている。
多種多様なレア種族が集まり、今や村とは言えない大きさになってるけど……村長やりながら、薬師として怪我人、病人の治療をしている毎日だ。
さて、エルダードワーフの穴倉というエルダードワーフの故郷で、エリクシールの最後の素材である『ソーマ水』が手に入った。
これでエリクシールが作れる。伝説の霊薬……俺の手で作ってみせるぞ!!

◇◇◇◇◇◇

エルダードワーフの穴倉から戻った俺は、住人への挨拶もそこそこに薬院へ。
薬院では、人狼族のフレキくんとマカミちゃん、そしてダークエルフのエンジュがいた。どうやら休憩中らしくお茶を飲んでいる。
「師匠!!　おかえりなさい!!」

「ただいま。あ、これお土産、みんなで分けて食べて」
「わぁ〜、ありがとうございます!!」
穴モグラの干物をフレキくんに渡し、俺はダッシュで別室へ。
「……なんや、えらい慌てとるなぁ」
「何かあったのかな？」
「師匠があそこまで急ぐなんて……まさか、怪我人？」
エンジュ、マカミちゃん、フレキくんが俺を心配する。申し訳ないけどそれどころじゃない。
薬院には俺の部屋がある。ここで休憩したり医療記録を書いたり、植物魔法で作り出した通信用植物のリンリン・ベルで、実兄のリュドガ兄さん、兄さんの親友であるヒュンケル兄、俺の恩師であるエルフのシャヘル先生に連絡をする。
俺は荷物を投げ捨て、リンリン・ベルを掴む。
連絡するのは……シャヘル先生だ。
『はい。どなたですかな？』
「シャヘル先生!!　ついに、ついに揃いました!!　俺、ついにやりました!!」
『あ、アシュト君？　落ち着いて……何があったのですか？』
「揃ったんです!!　あの、霊薬エリクシールの素材が、素材が!!　げーっほ、げっほ!!」
『……落ち着いて。まずは深呼吸を』

やばい。興奮しすぎて呼吸を忘れて叫んでた。
俺は深呼吸し、自分の頭を軽く小突く。落ち着け、アシュト。
「ふぅ……すみません。取り乱しました」
『いえ。それでは、最初からよろしいですかな？』
「はい。では……」
俺はエリクシールの素材が全て揃ったことを説明した。
以前、ビッグバロッグ王国に帰省した時に、エリクシールの素材を集めていることをシャヘル先生には説明した。だが、何年かかるかわからないということは伝えておいた。
だが、揃った。
エルダードワーフの穴倉で見つけた『ソーマ水』……最後の材料が揃ったのだ。樽詰めしたものは運んできたが、あとでもっと送ってくれるそうだ。
『なんと、まさか……伝説の霊薬の素材が』
「はい。揃ったんです……これで、これでエリクシールを作れます!!」
『……』
「……シャヘル先生？」
『あ、ああ。すみません……年甲斐もなく胸の高鳴りを感じまして、困惑していました』
俺がシャヘル先生に連絡した理由を話す時が来た。

最初は一人でやるつもりだったけど……やはりダメだ。
「先生、お願いします……どうか、その目でエリクシールの誕生を見届けてください」
『アシュト君……』
「薬師にとってこれほどの挑戦はありません。俺、エリクシールの精製をシャヘル先生に見届けてほしいんです。シャヘル先生が教えてくれた知識を使って伝説の霊薬に挑戦するなら……シャヘル先生がいないとダメなんです」
『……』
「お願いします。シャヘル先生、どうか」
『わかりました』
「え」
やべ、ちょっと間抜けな声が出てしまった。
シャヘル先生の声は明るく感じる。
『実は温室の改装を行いまして。摘める薬草は全て収穫し畑には何もない状態なのですよ。これなら留守にしても問題ありません』
「え、え」
『さすがに、老体の身一つでオーベルシュタインに行くことはできません。ヒュンケル君とリュドガ君に相談して、オーベルシュタインに向かえるように頼んでみます』

「ほ、本当に」
『はい……弟子の立派な姿を見せてもらいましょうか』
「シャヘル先生……!!」
やべ、涙が出てきた。
俺は目元を拭い、しっかりした口調で言う。
「ヒュンケル兄には俺からも連絡してみます。えへへ……が、頑張ります!!」
『はい。楽しみにしています』
シャヘル先生との通話が終わり、俺はすかさずヒュンケル兄に連絡する。
『おーう、どうし「ヒュンケル兄!!」うっぉぉ!? こ、声でけーよ!?』
「シャヘル先生がオーベルシュタインに行けるように手配して!!」
『……最初から説明を頼むわ』
こうして、シャヘル先生のオーベルシュタイン訪問が決まった。
ヒュンケル兄に説明すると、『任せとけ』と言ってくれた。
護衛とかあるんだろう。こちらから竜騎士を手配してもいいけど、竜騎士は俺の私物じゃないし……ローレライやクララベルに相談すれば簡単だけど、完全な私用に竜騎士を使うのは気が引ける。
連絡を終えてフレキくんたちの元へ戻ると、エンジュが穴モグラの干物を齧っていた。

「村長、これ美味いわぁ〜、塩気がたまらん」
「気に入ってよかった。マカミちゃんはどう？」
「見た目はアレですけど美味しいです‼　ね、フレキ」
「うん。師匠、美味しいお土産ありがとうございます‼」
「いやいや、薬院で仕事してくれたし感謝するのはこっちだよ。それと、またお願いがあるんだ」
「はい？」
首を傾げるフレキくん。でも、これはフレキくんにしか頼めない。
「実は、俺の恩師……薬師の師匠が来るんだ。伝説の霊薬エリクシールの素材が揃ったから、一緒に精製するためにね」
「え、え、エリクシールですか？」
「うん。本当に、本当に申し訳ないけど……この作業は俺と恩師の二人だけでやりたい。その間、フレキくんとエンジュには薬院で仕事をしてほしい。俺は精製の準備があるから、薬院にはいるけど仕事はできない……頼めるかな？」
「ええでー」
「わかりました‼」
早っ……エンジュとフレキくん、まったく迷わなかった。
「師匠の恩師……あの、挨拶してもいいですかね？」

「うん、もちろん。俺も紹介したいからね」
「うちも会ってみたいなー」
「たぶん、先生も会いたいと思ってるぞ。ダークエルフなんて見たことないだろうし」
「あたしも挨拶していいかな？　薬師じゃないけどね」
「もちろん。マカミちゃんにも紹介するよ」
フレキくんたちは薬院での仕事を引き受けてくれた。
よーし、これで俺はエリクシール精製の準備に集中できる。
話が終わり、俺も仕事を始めようとすると、フレキくんに言われた。
「師匠、今日から仕事はお休みください。というか、エルダードワーフの穴倉から帰ってきたばかりですよね？　エルミナさんたちに会いに行った方がいいんじゃ」
「あ……」
「なんやフレキ、ええこと言うやん」
「確かに……あたしも驚いた」
「な、なんだよ、エンジュもマカミも……ボクだって」
そういや、エルダードワーフの穴倉から帰ってきたばかりだった。荷物もあるしお土産もあるし、エルミナたちに挨拶もしていない。
フレキくんたちに感謝し、俺は家に戻ることに。

家に帰ると、リビングでお土産を広げている妹のシェリー、そして妻の一人であるハイエルフのエルミナ、同じく妻である龍人族（ドラゴニュート）ローレライ、その妹であるクララベル、二人の親戚である龍人族（ドラゴニュート）のアイオーンたちがいた。どうやら穴モグラの干物を珍しがってるようだ。

「あ、アシュト!!　おかえり～」

「おかえりなさい。いいことがあったようじゃない」

「お兄ちゃんおかえりっ!!」

「っと……ただいま、みんな」

飛びつくクララベルを抱きしめて頭を撫でる。うんうん、俺の奥さんたちは今日も美人だ。

すると、銀猫族でメイドのシルメリアさんがティーカートを押してきた。

「おかえりなさいませ、ご主人様。お茶の支度（したく）ができております」

「ありがとう、シルメリアさん。あとお土産あるから」

「ありがとうございます」

銀猫（ぎんねこ）たちはお茶好きなので、エルダードワーフの穴倉で飲まれているお茶を持ってきた。ドワーフたちは酒ばかりじゃなく、紅茶も栽培していたからけっこうな量をもらってきたのだ。

お土産を渡してソファに座ると、クララベルがネコのように腕に抱きついて甘えてくる。

「お兄ちゃ～ん……会えなくて寂（さび）しかったよぉ」

「よしよし。俺も寂しかったぞ。今日はいっぱい甘えていいからな」

「うん!!　えへへ……」

腕に抱きついてスリスリしてくる。まだまだ子供だな。

そして、反対側にはエルミナが。

「じゃ、私も甘えちゃおっと!!　アシュトぉ～♪」

「エルミナもか。まったく、仕方ないな……」

エルミナの胸が腕で潰れる……やわっこいな。

まぁ夫婦だし、こういうのもありだ。アイオーンがニヤニヤしてるのが気に喰わんけど。

すると、穴モグラの干物を砕いて食べているシェリーが言った。

「あれ？　ミュディはまだ帰ってないの？」

ミュディとは、俺の幼馴染で初恋の女の子……そして、今は妻の一人である。用事で出かけているんだけど。

俺も、穴モグラの干物をしげしげ眺めるローレライを見ると、ローレライは頷く。

「ええ。魔界都市ベルゼブブで忙しそうにしているみたい」

「ふーん……あ、ローレライも食べる？」

「ええ、いただくわ」

穴モグラの干物をポリポリ食べるローレライ。

ミュディがいないのか……なんかちょっと寂しい。
「アシュト村長。ミュディ様は別の機会に可愛がるとして……今夜は大忙しだべさ」
「は？」
アイオーンは、ニヤニヤと嫌らしい顔をして俺にボソッと言う。
「ふふ。皆さん、今夜はたぁ～っぷり可愛がってもらうといいべ」
「「「……」」」
「アイオーン、穴モグラの干物やるから出てけ」
「あんっ、ひどいぃぃっ!!」
アイオーンを追い出し、俺は奥さんたちとの時間を過ごすのだった。

◇◇◇◇◇◇

翌日。
奥さんたちを起こさないようにベッドから抜け出し、着替えをして外へ。
「まんどれーいく!!」
「あるらうねー!!」
「はは、おはよう二人とも」

『アシュト、アシュト!!　ヒサシブリ、ヒサシブリ!!』
「ウッドもおはよう。みんな、俺がいない間、温室の手入れありがとうな」
今日はフレキくんたちよりも早く起き、温室へ向かう。
俺がいない間、フレキくんが温室の手入れをしてくれていた。もちろん、薬草から生まれた少女マンドレイクとアルラウネ、そして俺が魔法で生み出した植木人（ツリーマン）ウッドもだ。フレキくんなんて、自分の温室もあるのに俺の温室まで……本当に頭が上がらない。
なので、今日から自分の温室は自分で手入れする。まぁ当たり前だけどな。
「じゃ、行こうか」
「まんどれーいく」
「あるらうねー」
『アシュト、イッショ!!　アシュト、イッショ!!』
ぴょんぴょんと跳ねるウッドと、俺と手を繋いで歩くマンドレイクとアルラウネ。
早朝で少し冷えるが、二人の手が温かい。
それと、ちゃんと言っておくか。
「マンドレイクとアルラウネ、近く頭の葉をもらうからよろしくな」
「まんどれーいく!!」
「あるらうねー!!」

マンドレイクとアルラウネの葉。
エリクシールの素材の一つで、二人がこの村に来て（育って）から何枚かもらって保存してある。
でも、香辛料になるマンドレイクの葉や、お菓子の素材になるアルラウネの葉はけっこう消費が激しく、保存しておいた分も使ってしまったのだ。
素材が集まるのはかなり先だから今保存しなくてもいいか……ってことで使った。欲しければ目の前に二人がいるしな。
でも、エリクシールの素材が集まった今、この二人にも協力してもらう。
「まんどれーいく」
「あるらうねー」
「あ、今じゃなくていい。俺が頼んだ時にくれ」
頭の葉を千切ろうとした二人を止め温室へ。すると、フェンリルの幼体であるシロが俺を見て飛びかかってきた。
『きゃんきゃんっ!!　きゃんきゃんっ!!』
「シロ!!　あはは、久しぶりだな……よしよし、よーし」
『きゅぅぅんっ!!』
シロ、もう成犬くらいの大きさになった。白くてふわふわして気持ちいい。
一通り撫でまわし、温室の作業を始めた。

マンドレイクとアルラウネが雑草を抜き、俺は薬草の状態を確かめ間引き……さすがフレキくんたちだ。薬草の手入れも完璧にしてある。
最後に、ウッドに水を撒いてもらう。すると、フレキくんたちがやってきた。
「師匠!!　おはようございます!!」
「おはよう、今日もいい天気だね」
「なんや、早いなぁ」
フレキくんとエンジュに挨拶すると、二人はさっそく作業を始めた。
俺もフレキくんたちの手伝いをして、手入れを終えてそれぞれ自宅へ。

食堂に行くと、みんな揃っていた。
朝食が運ばれてきたので早速食べる。やっぱり銀猫たちの作るご飯は絶品だなあ。
ふと気になった俺は、ミュディの席を見て言う。
「ミュディ、いつ帰ってくるんだろうな」
「ベルゼブブでイベントだっけ。大変ねー」
エルミナが、焼き立てパンを食べながら言った。口に食べもの詰め込んで喋るんじゃありません。
シェリーはパンを千切って言う。
「今頃、何してるのかな」

魔界都市ベルゼブブか。ミュディ、楽しんでるかなあ。

第二章　ミュディ・ブランド

時間は少しだけ巻き戻る。

アシュトがエルダードワーフの穴倉へ向かうことになった日。ミュディは、魔界都市ベルゼブブに建築された『ミュディ・ブランド総本店』の完成式典に出席する準備をしていた。

商人である闇悪魔族（ディアボロス）のディミトリに頭を下げられてまで頼まれた式典への出席……正直、ここまでブランドが大きくなるとは考えていなかったミュディにとっては、驚きしかない。

式典では、挨拶も頼まれた。緊張もあるが……少しだけ、気になることもあった。

それは、ベルゼブブに出店しているいくつかのブランド商品だ。

ミュディは、幼い頃から引きこもりがちだった。

絵を描いたり、メイドから裁縫を習って過ごしたりすることが多く、ビッグバロッグ王国のデザイナーが手掛けた洋服を見て驚いて、いつか自分もこんな服を作りたいと考えるようになり、アシュトやシェリーにも内緒で、スケッチブックに絵を描いては眺めていた。

緑龍の村に来て、デザイナーになる夢が叶った。

最高品質の素材が自然と集まり、自分のデザインした服や小物が自由に作れ、しかもそれを手に取って喜ぶ人がいることに、ミュディは心から喜んでいた。

ディミトリからベルゼブブにブランドの本店を造ると聞いた時も……正直、嬉しかった。

そして、こんなことも言われた。

「ミュディ様の実力なら、ベルゼブブのトップデザイナーになることも夢ではありません‼」

そう、ライバルがいるのだ。

ミュディは、ディミトリにお願いしてベルゼブブのデザイナーたちが手掛けた服を見せてもらい、驚愕（きょうがく）した。

自分の知らない世界が、そこにあった。

「総本店の完成式典には、ベルゼブブのデザイナーを大勢招待する予定です‼」

ディミトリの言葉を聞き、ミュディは自分以外のデザイナーに会ってみたくなったのだった。

◇◇◇◇◇◇

アシュトがエルダードワーフの穴倉へ向かった当日。

ミュディは、製糸場（せいしじょう）でベルゼブブに行くことをみんなに伝えた。すると魔犬族（まけん）の少女ライラが尻尾（しっぽ）を揺らしながらミュディにすり寄ってきた。

「わぅぅ……いいなぁ」
ライラの頭を撫で、イヌミミを揉み……ミュディは少し考えた。
「んー……ねぇライラちゃん。よかったら一緒に行く？」
「わふ⁉　いいの⁉」
「うん。お勉強ってことで、今回は一緒に行こっか」
「わぉーん‼　ミュディ大好き‼」
ライラは、製糸場のメンバーで一番若い。
勉強のために連れていくのは問題ないだろう。それにやる気もある。
他の魔犬族の少女やアラクネー族、悪魔族（デヴィル）の従業員たちは、引き続き仕事をしてもらう。ミュディはお土産をいっぱい買ってこようと決めた。

そして、その日の夜。浮かれるライラが銀猫族のメイド見習いであるミュアに事情を話すと、ミュアは暴れ出した。
「にゃあ‼　わたしも行きたいー‼」
ミュアがミュディに抱きつく。すると、シルメリアがミュアを引き剥（は）がした。
「ミュア。ミュディ様を困らせてはいけません。それにあなたはこちらで仕事があります」
「にゃあう‼　ご主人様もいないしライラばっかりずるいー‼　わたしも行くー‼」

「ミュア、暴れるのはやめなさい」
「にゃうぅぅぅ――っ‼」
ミュアはシルメリアに抱えられ暴れた。
マンドレイクとアルラウネは仲よく絵本を読み、騒ぎに興味のない黒猫族の少女ルミナは欠伸（あくび）をしながら魔獣図鑑を読んでいた。
すると、クララベルとドラゴンチェスをしていたローレライがミュディに言う。
「ねぇミュディ。あなたと一緒にベルゼブブに行くのって……」
「えっと、護衛と、あとモデルをお願いする、デーモンオーガ族のアーモさんとネマさん、ライラちゃんだけど」
「なら、お世話係も必要じゃない？　……ドラゴンチェック」
「あぁぁ⁉　ね、姉さま待った‼　待った‼」
慌てるクララベルを無視し、ローレライが言う。
お世話係。確かにそうかもしれない。行事は完成式典だけではない。新作のお披露目（ひろめ）もあり、数泊はする予定だ。
宿泊する場所はディミトリが手配するが、気の利（き）く小さな銀猫がいてもいいかもしれない。
「んー……わかった。じゃあ、ミュアちゃんも一緒に行こっか」
「にゃふ⁉　いいの⁉」

「うん。その代わり、お仕事はしてもらうからね」
「にゃあーっ‼　やる‼」
「……ミュディ様」
シルメリアが苦笑し、ミュアから手を離す。するとミュアはミュディに抱きついた。
「ふふ、可愛い」
「ごろごろ……」
こうして、魔界都市ベルゼブブに行くメンバーが決まった。

◇◇◇◇◇◇

アシュトたちがエルダードワーフの穴倉に到着した頃。
ミュディ、ミュア、ライラ、アーモ、ネマの五人は、大きな荷物を屋敷前に置いた。
荷物はディミトリがベルゼブブの宿に運んでおくというので、ミュディたちはほぼ手ぶらだ。
ミュアとライラは、緑龍の村で一番の癒し系魔獣である、真っ白なニコニコアザラシを背中に背負っていた。正確にはニコニコアザラシを模したリュックだ。
「にゃぅぅ～ん♪　たのしみー‼」
「わぅぅん♪　たのしみだねー」

二人はリュックから飴の瓶を取り出し、蜂蜜飴を一つ頬張る。
このニコニコアザラシリュックもミュディの新作の一つだ。子供向けに作った商品で、ベルゼブブで紹介する新作の一つである。
ネマとアーモは上機嫌だった。
「ディミトリが紹介する宿に高級バーってのがあるみたいよ。ねぇアーモ」
「お酒、タダで飲めるみたいね。ふふ、男どもには悪いけど楽しみましょ。ああ、もちろんミュディも一緒にね」
「え⁉　わ、わたし、お酒はあんまり」
「たまにはいいじゃない。ねぇネマ、女同士お喋りしましょ」
どうやら、拒否は難しい……でも、たまにはいいかもしれない。
屋敷の前で話していると、迎えのディミトリがやってきた。そして見知った顔も。
「おはようございます。皆様、お待たせしました……これより皆様を魔界都市ベルゼブブにご招待」
芝居がかった口調のディミトリを押しのけ、リザベルが前に。
「皆様の案内役を務めさせていただきますリザベルです。よろしくお願いいたします」
「あ、ちょ、リザベル⁉　ここはワタクシの」
「では、魔界都市ベルゼブブにご案内」

「ちょ⁉」
リザベルが指をパチッと鳴らすと、ミュディたちの足下に魔法陣が展開……一瞬の浮遊感を感じたと思ったら、景色がパッと切り替わった。
「到着です。ようこそ、魔界都市ベルゼブブへ」
ミュディたちの視界いっぱいに、大きな塔(とう)みたいな建物が飛び込んで来た。
魔界都市ベルゼブブ。
ミュディたちが転移した場所は、ディミトリ商会総本店である巨大施設の屋上だった。
ビッグバロッグ王城よりも大きな『塔』の上から町を眺めるような形になり、いきなりの光景にミュディはちょっとだけフラッとした。
「っひ、あわわ……」
「にゃあ‼　高いー‼」
「わふぅ……すごーい‼」
「驚いたわね……村の図書館みたいな『塔』がいっぱいあるわ」
「ネマ、あそこ。四角い箱が動いてる……中に人がいるわね」
各々が塔の上から町を見下ろし感想を述べる。ミュディだけへたり込んでしまったが。
町を見下ろすだけでなく正面を見る。なんと、似たような塔がたくさん立っている。
ビッグバロッグ王国よりも発展した大都市の様子に、ミュディは文字通り腰を抜かした。

「皆様。まずは本日のお宿にご案内いたします。本日はお休みいただき、明後日から完成式典の打ち合わせをしますので、それまでごゆっくりおくつろぎください」
リザベルが言うと、ディミトリが「あっ、ワタクシの役目……」とぼやく。
ミュディはアーモに起こされ、屋上から下の階に移動する。
「にゃう。せまいー」
「昇降機です。これに乗ればすぐに一階まで降りられます」
狭い箱の中に入って数十秒、箱の扉が開くと『ディミトリ商会総本店』の一階部分に到着した。
「わぁ～……すごい」
「わう‼　みてみて、あそこにミュディの服がある‼」
ライラが指差した場所には『ミュディ・ブランド』と書かれた看板が吊るされ、フロアの一角に服や小物が陳列されている。どれも見覚えのあるものばかりだし、それよりも驚いたのは人の多さだった。
大勢の人が、ミュディの作った小物やバッグを手に会計に向かっている。
「な、なんか嬉しいけど……ちょっとくすぐったいかも」
「わふ？　ミュディ、かゆいの？」
「そ、そうじゃないんだけど……あはは」
すると、ミュアがアーモに抱きかかえられた。

「にゃあ‼」
「こら、勝手に行かないの。迷子になっちゃうでしょ？」
「でも、お菓子いっぱい……」
「あとでいくらでも食べさせ……うーん、村長やシルメリアに怒られちゃうかな」
「にゃうー」
「まったく……しょうがない、少しだけね」
ミュアを抱えたアーモ。だがネマが「あそこ、お酒いっぱいあるよ」と言うと目を光らせ、ミュアにジト目で見られて赤面していた。
ミュディも知らないブランド商品があるスペースもあり興味をそそられたが、まずはリザベルの案内で宿へ向かうことに。
店から出ると、大きな車輪の付いた箱……魔道車が止まっていた。
運転手らしき悪魔族（デヴィル）がドアを開ける。
「ではご乗車ください。宿へご案内します」
「にゃうー‼　おもしろそう‼」
「わん‼　ミュア、乗ろう‼」
ミュアとライラが飛び込み、アーモとネマが乗り込んで子供たちを抱っこする。
ミュディも乗り込み、最後にリザベルが乗り込む。

「では、出発します」
魔道車はゆっくりと走り出し、五分ほどで目的地に到着した。
車から降りるとそこは、どこか宮殿を思わせる造りの豪華（ごうか）な建物だ。
「こちらが皆様の滞在する宿、『ホテル・グランディミトリエ』でございます。その名の通りディミトリ商会の建物ですので、気兼ねなくお過ごしください」
運転手が言うが、ミュディには聞こえていなかった。
「す、すごい……お城よりすごい」
「にゃおお……なんかキラキラしてるー」
「くぅん。ぴかぴか」
宿内は広いホール、ソファやテーブルは豪華なもので、受付カウンターですら気品を感じる。
ミュアとライラはロビーのソファにダイブし、アーモとネマは周囲を観察している。ミュディはリザベルから部屋の説明や食事する場所などを聞いていた。
「食事は一階にあるレストランでいつでもお召し上がりいただけます。レストラン内では生オーケストラで音楽を楽しみながら食事ができます。そして最上階はバーとなっておりまして、夜景を楽しみながらお酒も楽しめます」
「こ、言葉もないですね……すごい」
「飲食代は全て無料。滞在費と遊興費（ゆうきょうひ）も支給します。よろしければ明日、ベルゼブブの町を観光

されてはいかがでしょう？　差し支えなければ私がご案内しますが」
「お、お金まではちょっと……その、申し訳ないというか」
「その心配はまったく不要です。ディミトリ商会はミュディ・ブランドの総売り上げ金だけで昨年度の総売り上げをすでに超えている状況ですので。会長からも『お金に関する心配はまったく不要。全ての経費はこちらで持つ』と命令を受けておりますので」
「は、はぁ……」
　趣味で始め、自分が好きなデザインをして作ったものがここまで評価されていることに、未だにピンとこないミュディだった。
　少しだけ悩んだが、ミュアとライラが尻尾をフリフリしてミュディを見つめていたので、好意に甘えることにした。やはり可愛い子には弱い。
「じゃあ、お願いします」
「かしこまりました。では明日、お迎えに上がりますので」
　リザベルは一礼して帰っていく。
　ホテルの従業員がミュディたちをスイートルームに案内した。
　やはり、スイートとなると豪勢で言葉もない。ミュディ、ネマとアーモ、ライラとミュアの三部屋で部屋を準備していたようで、荷物もすでに届いていた。
　荷物を確認していると、ミュアたち四人がミュディの部屋へ。

「にゃう。たんけんしたいー」
「ここ、キラキラして面白そう‼」
　ミュアとライラは尻尾がこれでもかと揺れている。
　案内してくれた従業員の説明では、ホテル内にも飲食店やお土産屋が充実しているらしい。そろそろお昼が近いので、昼食をホテルで食べることにした。
「じゃあ、みんなでご飯を食べに行こうね」
　ミュディの提案で、女五人はホテルの地下飲食店街へ。
　ホテルの地下には多数の飲食店が店を構え、お土産屋も充実していた。
　レストランは上層、地下は大衆客が入るような飲食店で、酒場やちょっと洒落（しゃれ）たバーもある。お昼ということでどのお店も賑わいを見せている。
「わぅぅん……すごいいっぱい‼」
「ほんとだ……悪魔族（デヴィル）だけじゃなくて、獣人や蟲人（むしびと）もいる。ベルゼブブが他種族の受け入れに寛容ってリザベルが言ってたけど……すごいなぁ」
　ミュディは感動した。するとミュアが袖を引っ張る。
「にゃあ。ごはんー」
「あ、ごめんね。アーモさん、ネマさん、何か食べたいのあります？」
　ネマは周囲の店を見回し、一軒の店を指さす。

「とりあえず、初日だし無難な食堂でいいんじゃない？　アーモは？」
「あたしもどこだっていいさ。子供たちはどうしたい？」
「にゃあ。甘いのたべたい」
「くぅん。わたしもー」
「じゃあ、デザートに甘いの食べよっか」
ネマが指差した店は、一般的な食堂だった。
パスタや肉の種類が多くあり、ミュディたちは各々好きなものを注文。ミュディはサンドイッチ、アーモとネマは肉、ミュアとライラはパスタを注文。デザートにパフェを頼んだ。

子供たちはパフェを美味しそうに食べ、ミュディは食後の紅茶を飲んだ。
「夕飯はレストランで食べようね」
「わぅぅ。レストラン……」
ライラは楽しみなのか尻尾が揺れている。すると、ネマが言う。
「そういえば、部屋にドレスが掛けられてたね」
「ええ。あたしにピッタリなんだけど、何に使うのかね」
「あ、わたしもー」
「にゃあ。わたしもあったー」

「それ、レストランで着るドレスですね。ドレスコードっていうのがあるんだと思います」
格式の高いレストランではドレスを着なくてはならないとミュディは知っている。ディミトリが手配したものだろうかと思い、部屋に戻って確認することにした。
食事を終え、飲食店やお土産屋を見て回り、一行は部屋に戻った。
確かに、ミュディの部屋にもドレスが掛けられている。しかもサイズはピッタリだ。
「レストランかぁ……そういえば、お姉様と一緒に何度か行ったっけ」
ちょっとだけ、ビッグバロッグ王国が懐かしくなったミュディだった。

ドレスに着替え、『ホテル・グランディミトリエ』が誇る最高級レストランで食事を終えたミュディたち。
ビッグバロッグ王国で、高級料理の出る晩餐会に参加したことがあるミュディですら圧倒された。
食事内容はもちろん、食器からテーブルクロスに至るまで全てが高級品。ビッグバロッグ王国の王城にあるダイニングルームですら霞む光景だった。
ちなみに、ここで使われている食器や皿が、全て緑龍の村で作られたものだとミュディは気付いていない。
アーモとネマはドレスが鬱陶しいのか顔をしかめているが、出てくる料理は全て平らげる。ミュアとライラは最初こそ興奮していたが、料理の説明と味で参ってしまい、最後のデザート以外は静

かだった。
明日はお菓子屋さんに連れていこうとミュディは誓い、そのことを二人に話すととても喜んでいた。
子供たちを部屋に送り、お風呂に入れてあげるとすぐに寝てしまった。
かなりはしゃいでいたし疲れていたのか、二人並んでベッドで寝息を立てる姿はあまりにも可愛らしく、ミュディもそこに交ざって寝たいくらいだった。
二人を寝かせたミュディは自室に戻ろうとして……ネマに引き留められる。
「ミュディ、ちょっと付きあいなさいよ」
「はい？」
「お酒。ふふ、たまには女同士でお話ししましょ。まだ夜はこれからよ？」
「は、はい……お、お手柔らかにお願いします」
ネマに連れていかれたのは昇降機前。そこにはアーモがいた。
「上にあるわ。聞いたら、あたしたちの貸し切りでいいみたい」
「わお、それは嬉しいね」
「か、貸し切り……こんな立派なところで」
「さ、行くわよ二人とも」
アーモが昇降機に乗り込み、ミュディとネマも乗る。すると昇降機内にいた悪魔族（デヴィル）女性が案内してくれた。
「それでは、上に参ります」
今夜は長くなる……なんとなく、ミュディはそう感じた。

最上階のバーは、とても豪華で……もうミュディは表現することを諦めた。
ビッグバロッグ王国とは違う。アシュトと帰省した時にお酒を飲みに行ったバーとは雰囲気が違った。
室内にはミニ噴水があり、壁には大きな水槽（すいそう）が埋め込まれ魚が泳いでいる。水槽内ではキラキラした石や水草が揺れ、まるで絵画のようだった。
椅子（いす）やテーブルも豪華な装飾が施され、ミュディたちは窓際の一番いい席に案内された。
「わぁ～……すごい‼」
窓の外は、まるで宝石箱……ベルゼブブの町の明かりがキラキラと輝いていた。
ミュディが外の景色に見とれていると。
「この子には弱めの……そうね、甘いのをお任せで」
「あたしとアーモはキツイのをよろしくね」
「かしこまりました」
いつの間にかウェイターが来ていた。ネマは飲んでいないのにごきげんだ。

「ふふ、飲み放題だって。ディミトリも粋なことするわね」
「ミュディ、勝手に頼んじゃってごめんね。なんか声掛けづらくって」
「い、いえ。ありがとうございます」
アーモにお礼を言うと、お酒が運ばれてきた。おつまみに綺麗なチコレートがいっぱい並ぶ。
「こちら、ブラックブラッドのカクテルでございます。酒精が強いので一口ずつ、お楽しみください」
「お、いいわね」
「強いのは大歓迎よ‼」
「そしてこちら、『花妖精の蜜酒』になります。花妖精の採取した最高級のシロップを使ったお酒です」
「花妖精……フィルちゃん以外にもいるのかな」
蜂蜜のような液体で満たされたグラスを受け取るミュディ。
三人はグラスを掲げる。
「じゃ、かんぱい」
「かんぱーい‼」
「かんぱいです」
カチン、とグラスを合わせ、さっそく酒を口の中へ。

「わ、美味しい……甘いけど飲みやすい」と、ミュディ。
「っくぅぅ〜っ‼　確かにこれキツイわね」と、アーモ。
「でも美味しい‼　もう一杯‼」と、ネマ。
ネマがお代わりを要求。一口で飲み干し、つまみのチコレートを食べる。
ミュディもチコレートを一つ。とても甘い。
「ん……美味しいけど、こんな夜に甘いもの食べて大丈夫かなぁ」
ミュディが心配そうな顔をすると、アーモが背中をパシッと叩く。
「なーに言ってんの。あなたは真面目ねぇ、たまには悪いことしてもいいのよ？　そうよね、ネマ」
「そうそう。外に出た時くらい、はしゃがなきゃ‼」
「は、はい‼」
そう言えば、アーモとネマと一緒に飲んだことはない。というか、この二人と一緒に行動するということ自体、ミュディには経験がなかった。
改めて思う。この二人は『大人の女性』だ。
「あら、おつまみなくなりそうね……あのー、お魚系をくださーい」
アーモは、深いスリットから覗く生足を豪快に見せていた。足を組んでいるせいで下着が見えそうだが、そんなことまるでお構いなしと楽な姿勢でいる。それに、ドレスから覗く胸元や剥き出し

の肩や腕がとてもなまめかしい。褐色の肌は薄暗い室内ランプに照らされ、これでもかと色気を放っている。
「次は……そうね、あたしも甘いの飲もうかしら」
ネマも同様だ。アーモと同じく色気がある。
少しだけ赤く染まった褐色の肌がなまめかしい。お酒やおつまみを運んでくる男性悪魔が目を合わせないように必死になっていた……それに比べ自分は子供っぽい、ミュディはそう思った。
スタイルには自信がある……とまではいかなくても、胸もそこそこあるし体重だって重いわけではない。
アシュトが見たら硬直しそうになるドレスだって似合っている自信はある。でも……二人と並ぶと、やはりどこか子供っぽい。
歳を重ねた大人の魅力。ミュディはまだまだ二人に及ばないと思っていた。
「いいなぁ……」
「「ん？」」
「え、あ、いや……その、お二人は綺麗だなぁって」
「「……」」
アーモとネマは顔を見合わせ噴き出した。そして、ミュディの肩を抱いたり頭を撫でたりする。
「あはは、あたしらが綺麗ならあんたは可愛いね‼　羨ましいわ‼」

「そうねぇ。あんた、抱きしめるとすっごくふわふわだしいい匂いすんのよ‼　ああ可愛い‼」
「ひゃわわっ⁉　あの、あの」
「ほらほら飲んだ飲んだ‼」
「そうそう、まだまだ夜はこれからよ‼」
この日、ミュディは酔い潰れてしまうのだった。

◇◇◇◇◇◇

「にゃうー」
「わぅぅ」
「はいはーい、ちょっと動かないでねー」
ミュディは、ミュアとライラに新しく作ったドレスを着せ、軽くお化粧をしていた。
アシュトが作ったクリームを塗り、髪を梳かして整えていく。くすぐったいのか、身動ぎするミュアとライラの耳と尻尾がふるふる揺れた。
そんな動きが可愛く、ミュディの手が止まってしまう。
「あぁ可愛い～♪　ふふ、二人ともすっごくいいよぉ」
「ミュディ、まだー？」

「くぅん。早くいきたいー」
「あ、ごめんね。もうちょっと……」
アーモとネマは支度を終え、ミュディの化粧を待っている。ちなみにミュディに倣い二人も薄化粧をしていた。野性的で健康的な美しさが、ミュディの考案した少し露出の多いドレスとマッチして大人の色気を出している。
今日は、ディミトリ商会が新しくオープンする『ミュディ・ブランド総本店』の完成式典。ミュディはそこで挨拶し、新しくデザインしたドレスや小物を紹介することになっている。
式典には、ベルゼブブのファッション雑誌社から取材が来ることになり、ベルゼブブの有名デザイナーも多く集まるという。式典後は食事会も開催される予定だ。
控えめなミュディは緊張していたが、それと同じくらいワクワクしていた。
ベルゼブブの有名デザイナーが集まる。もしかしたら、挨拶したりお話ししたり、自分の作ったものに対する率直な意見を聞けたりするかもしれない。
緑龍の村では、ミュディのデザインや小物に意見する者はいなかった。
それが物足りなく、ちょっとしたスランプの原因でもあった。だが……今日、この機会はミュディにとって望むもの。自分を持ち上げようとする者はいない。厳しい意見や評価をしてくれるだろう。
「にゃぶぶ……ミュディ、くすぐったいー」

「あ、ごめんね」
ミュディは、ミュアのほっぺたをがっしりと掴んでいたようで、慌てて手を放した。
支度を終え、魔道車で移動すること数分。
ディミトリ商会が誇る『ミュディ・ブランド総本店』の建物が見えてきた。
「わぁ……お、おっきい」
「にゃあ。ミュディのお店すごいー」
「わぉーん。すごい‼」
横長の二階建てで、入口にはアラクネー族の作った彫像が置いてある。モデルはニコニコアザラシ……可愛いからとミュディがお願いして作らせたのだ。
入口には記者などが集まっていたため、裏口から入るミュディたち。するとディミトリとリザベルが出迎えてくれた。
「ようこそ。ミュディ・ブランド総本店へ……クックック、ついにこの日が来ましたな」
「は、はい……」
ディミトリが胡散臭すぎてちょっと困り顔のミュディ。すると横からリザベルが。
「では打ち合わせをしましょう。こちらへ」
「あ、こらリザベル‼　ここはワタクシの」

「ささ、どうぞどうぞ」
ディミトリを押しのけ、一行は中へ。
店内を案内してもらい、今日の流れを再確認。雑誌や新聞の取材もあり、その後は懇親会が開かれる予定だ。
とにかく、疲れる一日になるだろう。ミュディは気合を入れた。
「リザベル。他のデザイナーさんも来るんだよね？」
「はい。招待客として招待状をお送りしました。参加の返信を頂きましたので来られるかと」
「そっか。ふふ、楽しみ」
「……ライバルとなる方々ですが」
「ライバル？　あ、そっか……でもわたし、いろんなデザイナーさんとお話ししてみたいなぁ」
店内を見て回っていたアーモたちも戻り、ライラが興奮したようにミュディに言う。
「すっごいの‼　おみせ、すっごいの‼」
「ふふ、よしよし……」
「わぅぅん」
ライラを撫でると、ミュアも来た。
「にゃう。わたしもー」
「はいはーい。よしよし……」

「ごろごろ」
いつもはアシュトの仕事だが、今日はミュディが独占する。ライラはともかく、ミュアはアシュトにべったりなのでなかなか撫でまわす機会がないのである。
「今日は二人にもお仕事してもらうから、よろしくね」
「にゃあ。わかった‼」
「わぅぅ……ちょっと緊張するかも」
「だいじょうぶ‼　ライラ、わたしが付いてる‼」
「わふ。ありがと、ミュア」
ミュアがライラを抱きしめ頭を撫でる……なんとも可愛らしい光景にミュディはほっこりした。
「あたしらもやることあるんでしょ？」
「ま、内容は聞いたけど……こんなのでいいのかい？」
「はい。お二人もよろしくお願いします」
ミュディは、アーモとネマに頭を下げる。
最終打ち合わせを終え、全ての準備が整った。
もう間もなく、ミュディ・ブランド総本店の式典が始まる。
記者が中に入り、店内の様子を見て何やら妙な道具を構えて光らせた。

ミュディが驚き、隣に立つリザベルに聞く。ちなみにリザベルもドレスアップしている。
「な、なんですかあれ？」
「あれは『空間切取多面保存裸眼』です。略称は『カメラ』で、あの箱を覗いてボタンを押すと、見た光景がそのまま切り取られ絵となり出てくる、画期的な魔道具……記者の必需品ですね」
「かめら……すごい」
店内を『カメラ』に収める記者の前にリザベルが出ていくと、さっそくリザベルが『カメラ』に収められる。そして拡声魔法で声を大きくし、ミュディ・ブランド総本店の説明とミュディの紹介を始めた。
ミュディは、緊張して心臓が高鳴るのを感じる。
「ミュディ、がんばって‼」
「にゃう。がんばれー‼」
ミュアとライラが応援してくれる。
「うん、ありがと……ちょっといいかな？」
ネコミミとイヌミミを揉むと、少しだけ落ち着いた。
『それでは、ミュディ・ブランドの創設者。デザイナーのミュディを紹介します』
リザベルがいつもと変わりない表情でミュディを紹介した。
心臓が高鳴る。打ち合わせではこのまま登場し、記者質問となる。

ミュディは大きく息を吸い……吐く。
「よし‼」
ミュディは記者の前に出る。
『カメラ』の光が一斉に光り、ミュディは眩しそうに目を細めた。
リザベルの隣に移動すると、リザベルが指を鳴らす。
『こ、こんにちは。えっと……ミュディと申します』
リザベルの魔法によって拡声された声は、どこまでも謙虚だった。
こうして、ミュディは魔界都市ベルゼブブの表舞台に立つことになった。

挨拶、新作紹介、記者質問。
リザベルが言った通りに式典は進み、緊張もしたが時間は過ぎていった。
明日、ミュディの姿はベルゼブブの雑誌や新聞に載るだろう。『ミュディ・ブランドの創設者は可憐な美少女‼』という見出しで。赤面するミュディが容易に想像できた。
会見が終わり、食事会となった。記者たちは帰り、招待客だけの時間となる。
別室に円卓を並べ、バイキング形式の食事会だ。
招待客にグラスを渡し、ディミトリが壇上に立って挨拶をする。
『えぇ～……ディミトリ商会がプロデュースする「ミュディ・ブランド総本店」の繁栄と栄光

に……乾杯!!』

ニコニコ、ウハウハのディミトリがグラスを掲げた。

ミュディ・ブランドの宣伝は大成功。明日から忙しくなることは間違いない。

この日のためにスタッフも確保したし、商品も大量に仕入れた。以前から人気のあったブランドだけに、専門店が完成したことで得られる収入は計り知れない。

壇上から下りたディミトリは見知った顔に挨拶することに。

ぴっちりとしたスーツでキメた、熾天使族(セラフィム)にして『アドナエル・カンパニー』社長、ディミトリのライバルでもあるアドナエル、そして秘書のイオフィエルだ。

「これはこれはアドナエル社長。本日はようこそお越しくださいましたネェ」

「こ、これはご丁寧に……ディミトリ会長さんヨォ～……」

「おや、顔色が優れませんなぁ？　フフフ……」

「っぐ、ぐぐぐぅゥ～……」

悔しがるアドナエルに追い打ちをかけるようにイオフィエルが言う。

「社長。してやられましたね。ミュディ・ブランドは完全にディミトリ商会のものになりました。休暇なぞ取らずにもっと早くアプローチしておけば……」

「いやいやいや、休暇取れって言ったのイオチャンヨゥ!?」

「おや、そうでしたかな？　ですがこれはマズい……社長には責任を取っていただかねば」

「エェェ!?」

驚愕するアドナエルに、ディミトリは勝ち誇ったように胸を張って言った。

「フフフ。まぁゆっくりしてください。ここには美味しいお酒も食事もありますので……では!!クァーックァックァックァ!!」

「キィィィィーッ!!　ファーッキンッ!!」

今回ばかりは、ディミトリ商会の完全勝利だった。

ディミトリとアドナエルが騒いでいる頃、ミュディは大勢のデザイナーに囲まれていた。

ミュディは、挨拶とお酌(しゃく)の繰り返しで少し参っている。こんなに大勢に注目されることも、大勢の前でお酒を飲むことも慣れていない。ちょっとだけ疲れていた。

「はいはい、ここまで。ちょーっと通してね」

「ミュディ、お水のむ？」

「にゃう。ミュディ、だいじょうぶ？」

「あ、みんな」

アーモとネマがデザイナーたちをかき分け、ライラとミュアがそっと寄り添う。

ミュディはデザイナーたちに頭を下げ、休憩するために会場から少し離れた場所に来た。

「みんな、ありがとうございました」

「いいのよ。ったく、少しは遠慮しなさいっての。ねぇアーモ」
「そうね。まぁ興奮する気持ちはわからんでもないけどね」
「わぅぅ、ミュディ人気」
「にゃう、すごいー」
「あはは……すごい勢いだったよ。デザイナーさんってすごいんだね。わたし、もっと頑張らないと」
お冷を飲み干すと、このタイミングを見計らっていたように誰かが来た。
「あなたがミュディですの？」
「え？　あ、はい……わぁ」
目の前に現れたのは、とても美しい姿をした女性だった。
純白の長い髪、蒼い瞳、肌も白く染み一つない。着ているドレスは青と白を組み合わせたシンプルなもので、この女性が着るために存在しているかのように似合っていた。露出も多いが、この女性のスタイルにものすごくマッチしている。
女性には、斑模様の耳と尻尾が生えていた。
「見ろ、雪豹族のカレラだ……」
「ああ、ミュディさんに宣戦布告……」
「ベルゼブブ・ナンバーワンデザイナーの称号、取られたもんな」

「でも、美人だよな……」
「わかる……」
周囲がヒソヒソと女性を噂していたが、女性はそれらを無視。
ミュディに近づくと手を差し出す。
「初めまして。わたくしは雪豹族のカレラ……あなたと同じ、デザイナーですわ」
「あ、はい。えっと、初めまして。ミュディです!!」
慌てて手を差し出し握手。細くしなやかな指はどこか冷たかった。
そして、今気が付いた。カレラの後ろには二人の女性がいる。一人は少女、もう一人は大人の女性だ。
その女性は、銀色の髪にネコミミが生えていた。
「あ、銀猫族」
「ええ。わたくしの従者ですわ……あら？　あなたも銀猫を？」
「にゃあ!!　おなじだーっ!!」
ミュアは自分と同じ銀猫族の少女の側へ。歳も近いのか興奮していた。
「にゃう。わたしはミュア!!　あなたは？」
「……」
「にゃあ。おなまえ!!」

「……」
銀猫少女は喋らなかった。目を閉じてミュアを無視している。
カレラはミュアの頭に手を乗せる。
「にゃう？」
「んん～……可愛いわねぇ♪　このサラサラの銀髪、ふわっとしたネコミミ、それにこの活発な感じ。うちのメリルとは違うわぁ♪」
「にゃあ。この子、喋らない……」
「ああ、ごめんね。この子、わたくしの命令がないと喋らないのよ。もっと自由にしてもいいって言ってるのに……メリル、いいわよ」
「……はい。ご主人様」
「あ、しゃべった!!」
ミディアムのクセッ毛をした銀猫のメリルはようやくミュアを見た。あまり感情を表に出さないためミュアと正反対の印象を受ける。
もう一人の銀猫も頭を下げる。
「改めて紹介するわね。この子がメリル、こっちがアマンダよ。銀猫族なの」
「わたしと同じー!!」
「ふふ、そうね。あぁもう可愛い～……ねぇ、撫でていいかしら？」

「いいよー、お姉さん真っ白でふわふわ‼　きれいー」
「ありがとう。ふふ、可愛い……」
「にゃうー」
カレラはミュアを抱きしめ、頭を撫でてネコミミを揉む。
ミュアも気持ちよさそうにとろけていた。
「この子たちも触らせてくれるんだけど、あなたみたいに笑わないのよ……こんなに可愛いのにもったいない‼」
「にゃあ。きもちいいのにー」
「そうよ‼　こんなにも可愛いネコミミなのに‼」
「「申し訳ございません。ご主人様」」
メリル、アマンダはぴっちりと揃ってお辞儀する。カレラの興奮は一向に収まらない。
「じゃあ触らせて‼　メリル、こっちおいで‼」
「はい、ご主人様」
メリルはカレラに撫でられ、ネコミミを揉まれる……だが表情は変わらない。
そして、忘れ去られていたミュディが言った。
「あ、あの～……」
「はっ……ご、ごほん。えーっと、改めてこんにちは。わたくしはカレラ。『ホワイトジャガー・

立ち読みサンプル
はここまで

ブランド』の専属デザイナーですわ」
「は、はい。ふふ、可愛い子が好きなんですね」
「っ‼　そ、そんなことありませんわ‼　ところで……この子、アナタがご主人様なの？」
「にゃうー」
ミュアを撫でたまま言うカレラ。ミュディは首を振った。
「いえ、この子の主人はわたしの……えっと、夫です」
夫、という言葉に赤面する。
アシュトをこんな風に紹介したことがないので恥ずかしかった。
「あ、あなた。結婚してたのね……まぁいいわ。それより、これからライバルとなるあなたに挨拶しておきますわ。わたくし、あなたには負けませんわよ」
「はい。えーっと、仲よくしていただければ。あ、そうだ。よかったらわたしの住む村に遊びに来ませんか？　なんだかお友達になれそうなので……その、よかったら」
「そうですわね……では、近いうち」
宣戦布告と取ったのか、カレラは満足そうに微笑（ほほえ）んだ。
カレラは尻尾を翻（ひるがえ）し、銀猫のメリルとアマンダを引き連れ去っていく。
「またねー‼」
「ええ、またね」